

## 〈変態〉する身体：村上春樹「神の子どもたちはみな踊る」論

田中，律子  
九州大学大学院比較社会文化学府修士課程二年

<https://doi.org/10.15017/15103>

---

出版情報：九大日文. 12, pp.90-105, 2008-10-01. 九州大学日本語文学会  
バージョン：  
権利関係：



「小特集―村上春樹『神の子どもたちはみな踊る』論」

## 〈変態〉する身体

メタモルフォーゼ

―村上春樹「神の子どもたちはみな踊る」論―

田中 律子  
TANAKA RYOKO

固有名へのこだわり、あるいは受容のありようという問題状況

村上春樹は短篇集『神の子どもたちはみな踊る』（新潮文庫、二〇〇二年三月）において、たとえば次のように固有名に強くこだわっている。

ニミットというのがファーストネームなのかラストネームなのか、それもわからない。しかしとにかく彼はニミットなのだ。（「タイランド」）

「ねえかえるさん」と片桐は言った。  
「かえるくん」とかえるくんはまた指を一本立てて訂正した。（「かえるくん、東京を救う」）

それぞれについて、ここで詳細に論じることではないが、

この固有名へのこだわりは受容という問題と関わっている。そして、その問題は『神の子どもたちはみな踊る』という短篇集全体に通底している。さつきが「しかしとにかく彼はニミットなのだ」と言うとき、それはさつきがニミットという人間を受け入れていくこと、さらには自分自身を受け入れていくということと同じ地平にある。あるいはかえるくんの執拗な「訂正」によって片桐が「かえるさん」ではなく「かえるくん」と呼ぶとき、それは片桐がかえるくんという「暗喩とか引用とか脱構築とかサンプリングとか」ではなく「本物の蛙」「実物の蛙」としてその存在を受け入れていくことと同時に、自分自身を受け入れていくということと同じ地平にある。ここで問題としたのは、この受容のありよう、ということである。それは（自己も含めた）他者との関係ということではないのか。いや、そうではない。自分自身も他者であるなどといったことを含めても、それを他者との関係と言ってしまうては問題の焦点がずれてしまうし、受容のありようということが指す錯綜した問題状況がきれいに均されてしまう。それはテクストの持つ手触りが失われてしまうということでもある。たとえば「石」とか「うるこだらけの緑色の蛇」とか「北極熊」とか「実物」としての「かえるくん」とか「みみずくん」とか……最初それらがわれわれに与える異物感、にもかかわらずいつのまにか自分にとって親密なものになっていくという奇妙な感覚。テクストがわれわれの内部にいつのまにか棲みついてしまっているような実体としてのテクストの手触り。その手触りを感じるとき、われわれは

自分が幾許かの変容を遂げていることに気づくはずだ。受容は変容を伴わずにはいけないのだ。ここで強調したいのは、そのような受容（あるいは変容）の現場を検証することで何が見えてくるのかということである。

短篇集『神の子どもたちはみな踊る』の中でも、とりわけ「神の子どもたちはみな踊る」における善也という固有名は善也の特殊である。結論を先取りして言えば、善也という固有名は善也の身体（変態）を要請する。本稿は名が身体（変態）を要請する理路と（変態）の過程を追跡・検証し明らかにするものであり、加えて言えばそれは超越性という問題とも接踵することになる。

### しるしとしての〈固有名〉と〈身体〉

「善也」という名は「天におられる方のお子さま」として『お方』の世界への「導き役」田端さんによつて名づけられた。善也は「善也」という名によつて、『お方』の子ども、すなわち「神の子ども」として生きることを運命づけられたわけだ。しかし、物心ついた善也はその運命をうまく受け入れることができなくなっている。「善也のお父さんは『お方』（彼らは自分たちの神をそういう名で呼んだ）なんだよ、と母親は小さい頃から彼に繰り返し言い聞かせていた」し、「善也の子ども時代の「導き役」をつとめた田端さんも同じことを言った」が、「善也にはうまくのみこめ」ない。なぜなら、「普通より少しばかり下の

場所にいる」「自分が「神の子」というような特別な存在だとは思えなかったからだ」。その「普通より少しばかり下の場所」というとき、とくに身体的なことが強調されていることは注意されてよい。

足は遅かったし、ひよろひよろしていて、近眼で手は不器用だった。野球の試合に出ればたいいのフライを落とした。チームメートは文句を言い、見物している女の子たちはくすくす笑った。

「神様の子ども」であるにもかかわらず不如意な身体をもつ善也。いや、むしろ「神様の子ども」であるがゆえにと言うべきかもしれない。どうということか。名と同じく「神様の子ども」としてのしるしが「子どもの頃からずっと一貫して大きかった」ペニスである。母親は「善也のおちんちんがそんなに大きいのは、善也が神様の子どもであるしるしのよ」と「自信たっぷりに言っていたし、彼もそれを素直に信じていた」。しかし、「神様の子どもであるしるし」をもつ身体は「世間」のコードには合致しない身体であった。ここでは、「神様の子ども」は「文句を言」われ、「くすくす笑」われるしかない。そして、善也は「神様の子どもであるしるし」をもつ身体を生じせしめたところの「父親である神様」に祈る。

いつまでも変わることなく信仰心を堅く持ち続けますか

ら、うまく外野フライがとれるようにしてください。それだけでいいんです。ほかには今のところ何も求めません。

しかし、「神様の子ども」としての身体と「世間」のコードに同時に合致する身体は与えられない。それらは相容れないのだ。この相容れなさは、「世間」に住まう善也と「天におられる」「父なるもの」との一方的関係としてあらわれる。「父なるもの」は限りなく「冷ややか」で「暗くて重い、沈黙する石の心」をもつ。

「タイランド」の最後部に置かれる北極熊のエピソードを想起してもよい。「偶発的に出会」い「交尾」すると、「文字どおり一目散に、後ろも振り返らずに逃げ去」る北極熊。そこには「相互コミュニケーション」というようなものはいっさい存在「せず」、「心のふれあいも」ない。善也は、北極熊の世界で生きることのできなかった熊である。『お方』の世界の中で生きること、「誇りに思つて、正しく生きなくてはいけないよ」という田端さんの導きから逸れ、別の「世界」で生きることが望むようになる。この「棄教」が意味するところは、「神様の子どもであるしるし」をもつ身体が棄教を帰結するという善也の身体のアイロニーである。善也は「神様の子ども」として生きるという運命を背負うことになったものによつて、その運命から逃れざるをえないという一種のアンチノミーを生きる存在である。そして、身体が《変態》を遂げるということは、この二律背反を超越することにほかならない。しかし結論を急ぐことをせず、まずは棄教にいたる過程を検証することから始めよう。

## 内閣、あるいは予言の呪縛

宗教とは何かを問うことはここでは問題が広がりがすぎるが、少なくとも『お方』の世界が「超越性」として機能しているということができる。超越性とはなにか。大澤真幸の端的な説明によると次のようなことである。

いかなる経験も、まさに経験がそこにおいて展開している「世界」を前提にしている。どんな経験にも、「与えられた地平」のようなものがともなっているのである。超越性とは、この経験が前提にしている世界・地平を構成する働きのことである。つまり、それは経験の可能性そのものを構成する働きのことである。「夢」を用いた比喩に仮託して言えば、超越性とは、まさに夢と呼ぶにふさわしいような一顧の世界・物語を、囲い込む働きのことなのである。夢という比喩を呼び寄せている、生の閉じられた性格は、超越性の働きに由来しているのだ。(『身体の比較社会学』勁草書房、一九九〇年四月)

たとえば、田端さんが今際の際に「この世の人生は束の間の苦しい夢に過ぎないし、私はお導きによつて、なんとかここまでくぐり抜けてきた」というとき、それはまさに田端さんが、『お方』という物語を生きてきたということを意味する。そして、

このような超越性の働きのもとに、世界に内在するあり方そのものが身体にほかならない。

「父なるもの」としての『お方』は、存在者を現出させる「地平」をつくりだす超越性として存在する。もちろん超越性そのものは、なんら否定されるべきものではない。あらゆる行為は超越性によって規定されるしかないからだ。超越性なき世界は「できたての泥の海のように混乱」するほかない。問題は「導き役」である田端さんが『お方』のもたらす世界の地平を絶対的なものとして受け入れることを「正しいこと」として善也に強いることである。『お方』の世界に「すつぱりと包まれて生きている」とき、『お方』は何らかの対象としてではなく、けっして相対化することのできない絶対者、すべてを規定する超越者としてある。

「善也くん、それは『お方』を試すことだ」と、田端さんはきつぱりと言った。「祈ることは悪いことではない。しかし君はもつと大きなこと、もつと広いことについて祈らなくてはならない。具体的な何かについて、期限を区切って祈るのは、正しいことではないのだよ」

「もつと大きなこと、もつと広いこと」すなわち『お方』の世界に属することについて祈ることが「正しいこと」であり、「世間」に属する「具体的な何かについて、期限を区切って祈るのは、正しいことではない」のだ。つまり、田端さんは、超

越的な『お方』の世界と「多くの人」の「世間」とは相容れないことを善也に「きつぱりと」説くのである。重ねて確認しよう。『お方』の世界が絶対者だということは、その世界に住まう限り、「多くの人」の住まう「世間」にも自己の存立の基盤を求めることは出来ないし求めてはならないということ、『お方』の世界から出ることはできないし出てはならないということである。

こうした『お方』の世界の内閉性は、自己の相対化を拒むことによつてその世界の自動性を増し、世界それ自体としての純度を加速度的に高めていくにちがいない。そして、それは『お方』の世界の二面性となつて現象することとなるはずだ。その表の顔が善也の母によつて体現されるものであり、裏の顔が「父なるもの」の限らない冷ややかさ、「重くて暗い、沈黙する石の心」であることはいうまでもない。念のため、前者については具体的表現を列挙しておこう。

▼一人で放つておいたら、母親が何をしでかすかわかつたものではないというのも、理由のひとつである。善也はこれまで何度となく、母親がその突発的で往々にして破壊的な（そして善意に満ちた）思いつきを実行に移すのを、全力を尽して阻止してきたのだ。

▼肉のまぐわいによつてではなく、『お方』のご意志によつて善也はこの世界に生まれたのよ、母親は燃えるような目できつぱりと言った。

▼「私たちは何かを無理に押しつけたりはしません。私たちは差し出すだけです」と彼女は熱い声で、燃えるような目で語った。(中略)でも私は天におられる方の手によって救いあげられ、今ではこの子とともに、そして『お方』とともに生きる輝きの中にいます」／善也は母親に手を引かれて知らない家の戸口をまわることを、とくに苦痛には感じなかった。そういう折には母親はとくべつ優しくかつたし、その手は温かかった。

ここには内閉した純度の高い絶対的世界に守られて住まうことの、(ときには常軌を逸してしまうほどの)情熱と充実と安息がある。

「タイランド」に登場するニミットの主人(ニミットはその主人を「その方」と呼ぶ)が宝石商であり、「その方」から「譲り受けた」のが「古い型の紺色のメルセデス・ベント」であることを思い出そう。宝石は「その方」とニミットの世界の純度の高さ(と世俗を排したある種の崇高さ)を思わせるし、メルセデス・ベントは二人の内閉的世界を思わせる。ニミットはそのメルセデス・ベントを「宝石のように美しく磨き込」み、「新車よりも美しい」ほど大切にしている。そのニミットが、「まるでその方の一部」となり「自分が本心で何を求めているのか、それさえもだんだんわからなくなつて」「ある意味では一心同体のようになつてしまふ」恐さに自覚的でありながらも、「何ひとつ後悔」せず、「もし人生がもう一度私の手に与えられたなら」「まったく同じことを」「もう一度同じことを繰り返す」というと

き、彼は母親の目と善也の目で「その方」を見ている。つまり、母親と善也はそれぞれ片目をつぶつて、一方は『お方』の表の顔を見、一方は『お方』の裏の顔を見たのである。そして、裏の顔を見た善也はその世界に絶望し、十三歳のとき「父なるもの」を棄て、「神様の子ども」善也からただの子ども善也として生きる道を選んだのだつた。しかし、ただの子どもとして生きようとする善也の前に立ちふさがれるものがあつた。それは母への欲望である。

善也が中学校に上がり、性的な関心に目覚めてからも、平気で下着姿で、ときには全裸で、家の中を歩き回つた。寝室はさすがに別だつたが、夜中にさびしくなるとほとんど何も身につけないかっこうで彼の部屋にやつてきて、布団の中に潜り込んだ。そして犬か猫のように、善也の身体に腕をまわして眠つた。母親に邪気のないことはよくわかつていたが、そんなとき善也の心はけつして穏やかではなかつた。勃起していることを母親に悟られないために、彼はひどく不自然な姿勢をとらなくてはならなかつた。

なぜ善也は母を欲望せねばならないか。この欲望を生む根源的な端緒は田端さんの予言にある。

大崎さん、それは誰の子どもでもありません。天におられる方のお子さまなのです。私はその生まれてくる男の子

に善也という名前をつけましょう。田端さんの予言通りに男の子が生まれ、善也と名付けられ、母親はもう誰ともまぐわうことなく、神の使いとして生きることになった。

この予言がなぜ母を欲望させるのか。柄谷行人の「マクベス論」を補助線として引くことで事は見やすくなる。

魔女の予言を聞いて以来、マクベスはぼんやりしている。重要なのは彼がぼんやりしているということであって、われわれはそこに権力への野心を抱いた人間とかそのことで迷っている人間とかでなく、なにか理由の知れない憂鬱を背負いこんだ人間を見出すだろう。(略)彼をこのように変化させたものは、彼の中にあつた野心ではなく、むしろ彼の中には無いもの、いいかえれば彼の中には何も無いという発見にほかならないのである。

王になるといふ魔女の予言は、「運で王になれるものなら、手をくださなくても、向うから舞いこまぬでもあるまい」と、マクベスに考えさせる。王になるのが必然だとしたら、自分で手を下しても下さなくても同じことだ。実は、こう考えたときにすでにマクベスは彼がいま実際にコーダの城主であるという事実の確かさ、これまで彼が生きてきた武将としての生活の確かさを失っているのである。彼は未だに王でないということのほかは何者でもない存在となる。(『意味という病』河出書房新社、一九七九年十月、傍線引用者)

われわれは、ここに善也と同型の人間を見ることができ。すなわち、超越的な他者による予言を内面化した人間、予言に呪縛された人間である。善也は予言によって「なにか理由の知れない憂鬱を背負いこんだ」マクベスである。さらに先走ることを承知で言えば、マクベスが「未だに王でないということのほかは何者でもない存在」であるように、善也もまた「未だに」

「神様の子ども」でないということのほかは何者でもない存在である。どういふことか。次節でその理路はたどられるだろう。さしあたって今の段階で言えることは次のようなことである。たしかに田端さんの予言は母親を救った。「神の使いとして生きる」という契約を結ぶことによつて。しかし、そのアイロニカルな身体ゆえに苦悩し棄教した善也の姿を見てきたわれわれは、田端さんの予言の両価性に気づくことができる。田端さんの予言は母親を救った代わりに善也に苦悩する身体を与えたのだ。この予言によつて、母親は「暗雲のうしろに隠されていた」「正しい光」がふりそそぐ『お方』の世界に安住の地を見いだした代わりに、善也は(名)に呪縛され、存在すること自体の憂鬱とでもいふべきものを背負いこんだのだ。この存在すること自体の憂鬱の象徴が善也の「大きなおちんちん」であることはもはや説明を要さないだろう。この「大きなおちんちん」は「地」を失って判読不能となった「凶」のようなものになったのだ。

さて、意味を剥奪された「大きなおちんちん」は自分が何者

であるかを探求する旅に出なければなるまい。われわれは、棄教と母への欲望の自覚が同じ時期であることを道標としてその旅をたどることとなる。ここでその道行きを予告として言えば、善世の身体のもうひとつのアイロニーが、過酷な通過儀礼を善世に強いることになるだろう。しかも、それはある種の儀礼のように形式化されないがゆえ、通過するには長い時間と深い苦悩を必要とする曲がりくねった隘路とならざるをえない。

**通過儀礼としての母への欲望と求婚の拒絶、あるいはさなぎとしての身体**

善世の母は美しい。

善世の母親は43歳だったが、30代半ばにしか見えなかった。顔立ちは端正で、いかにも清楚な感じがした。粗食と、朝夕に行なう激しい体操のせいでスタイルはきれいに保たれ、肌は艶やかだった。おまけに善世とは18歳しか年が違わなかったから、しよつちゆう姉と間違えられた。

ここで「タイランド」ニミットの手を思い出してもよい。ニミットの手は「不思議なほどつるりとした、若々しい感触の手だった。まるで上等の手袋に包まれて護られつづけてきたような」。ニミットは「その方」から二人の内的世界を象徴する「カセットテープごと」「譲り受けた」「メルセデス・ベンツ」を「新

車よりも美しく」「宝石のように美しく磨き込」み、「古いジャズ」を聴き続けることで、「その方」との世界を守り続けている。田端さん同様「面倒な戒律を厳格にまもって、神様と密接な関係を結んで生き」ることで、『お方』に守られている母も同じように美しい。しかし、その美しい母が、善世の棄教によって崩壊の危機に晒される。

13歳になって、自分が信仰を捨てると宣言したとき、母親がどれほど深い悲嘆にくれ、取り乱したか、善世は今でもよく覚えていた。半月間ほとんど何も食わず、口をきかず、風呂に入らず、髪もとかさず、下着も替えなかった。生理の手当てさえろくにしなかった。そんなに汚く臭くなくなった母親を目にしたのは初めてのことだった。

ここにあるのは、身体の崩壊である。棄教は、母を守ってきたものを棄てることである以上、母の身体の崩壊を帰結するのは当然であろう。「夜中にさびしくなると、ほとんど何も身につけないかっこうで彼の部屋にやってきて、布団の中に潜り込」み「犬か猫かのように、善世の身体に腕をまわして眠」る母は息子と「一心同体のよう」なものであるうから。美しい母が「そんなに汚く臭く」なるのは自分の住まう世界の崩壊の危機に瀕して身体もまた崩壊しようとする姿なのである。しかし、ここで強調したいのは、善世がそこに自分自身の闇をも見、身体の崩壊を見ずにはいなかったらうということである。善世は棄教



によつて『お方』の世界を捨て、新たな世界を求める旅に出た。そこは未だ光射さざる「深い闇の中」を手探りで進む旅である。

「神様の子どもであるしるし」という意味を脱ぎ捨てた「大きなおちんちん」は、闇の中に「のそりと」「いかにも愚かそうに不器用そうに見え」る、つまり一歩間違えば母のように崩壊するしかない身体である。

母親の身体に自分自身の崩壊を幻視した「大きなおちんちん」に課せられた通過儀礼こそが母への欲望にほかならない。このことは、棄教と母への欲望が同時期（それぞれ「13歳」「中学校に上がったころ）であることが示唆するところであるが、ではなぜ母への欲望が通過儀礼として機能するのかをあきらかにせねばなるまい。大澤真幸によれば、近親相姦に対する禁止（インセスト・タブー）は「近接した身体間の（自己）性／（他者）性をめぐる混同を、抑止」するものであるが、それが前提するのは次のようなことである。すなわち、同一の超越性のもとにある複数の身体は、互いを同一的なものとして認知しあう。とすれば、インセストが禁止されている近接性の範囲が、その身体を規定する超越性の及ぶ身体の範囲（超越性の作用圏）を意味することになるわけである。よく知られているように、レヴィ・ストロースはこれを女性の交換という機能主義的な視点から説明してみせた。大澤によるとこの説明は「高度に疑わしい」が、「近親相姦の禁止の問題は、タブーが適用されている共同体の内部の問題であるだけでなく、むしろそれ以上に、共同体が外部（の共同体）と関係する仕方についての問題でもある、という

ことを示唆している」ことは有意義であるとしている（『身体の比較社会学Ⅱ』勁草書房、一九九二年九月）。この知見は、われわれの問題をどう前進させてくれるだろうか。

母親と致命的な関係におちいることを恐怖するがゆえに、善也は手軽にセックスの相手をしてくれるガールフレンドを必死になつて捜し求めた。そのような相手が身近に見つからない時期には、意識して定期的にマスターベーションをした。高校生のうちから、アルバイトした金で風俗店にまで通つた。そのような行為は余つた性欲を処理するためというよりは、むしろ恐怖心から発したものだつた。

ここで注目すべきは、母親への欲望そのものではなく、むしろそれが果たされることを「恐怖」しているということである。先の大澤の考察に照らせば、善也が母親と合一することは、まさにその生きられる世界を共有する身体となることを意味しよう。つまり、善也の身体が、棄てたはずの『お方』の世界に絡めとられてしまうということにほかならない。このことこそが、善也を「恐怖」させる当のものなのである。『お方』の世界の外部に出るためには、何としても母親との合一は避けられねばならないのだ。悲愴ともいえる善也の性の発散の所以である。こうして善也の愛なき「まぐ、わい」は続く。

しかし、母への欲望を逸らすための、すなわち母との合一を忌避するための愛なき「まぐ、わい」は奇妙なことを帰結する。

善也が、「まだ十代のころ」の母親の「魂」が「できたての泥の海のように混乱して、乱れ」「正しい光は暗雲のうしろに隠され」「何人かの男の人と愛もなくまぐわった」ことを聞かされるのは十七歳のときである。皮肉なことに、母との同一化を忌避しようとしたことが、逆に形を変えた同一化を招いていたのだ。なぜなら、それは若き日の母をなぞり、反復して生きることにほかなるまいから。この反復を善也が自覚しているかどうかは問題ではない。むしろ、われわれはこの自覚なき反復、無意識の反復にこそ身体のもつ根源性とアイロニーを見るべきである。母の人生を反復することは、結局通過儀礼が失敗に終わったということ、すなわち棄てたはずの『お方』の世界への逆行ということの意味するにほかならないのだから。

しかし、通過儀礼としての旅は新たな道行きにさしかかる。そこに登場する道連れは、新たな「導き役」である。

大学時代にずっとつきあっていた女の子は、彼のことを「かえるくん」と呼んだ。彼の踊り方が蛙に似ていたからだ。彼女は踊るのが好きで、よく善也をディスコに連れていった。「あなたってほら手足が長くて、ひよろひよると踊るじゃない。でも雨降りの中の蛙みたいで、すごくかわいいわよ」と彼女は言った。

善也はそれを聞いていささか傷ついたが、それでも彼女につきあつて何度も踊っているうちに、踊ることがだんだん好きになつてきた。音楽に合わせて無心に身体を動かす

ていると、自分の身体の中にある自然な律動が、世界の基本的な律動と連帯し呼応しているのだというたしかな実感があつた。潮の満干や、野原を舞う風や、星の運行や、そういうものは決して自分と無縁のところでおこなわれているわけではないのだ、善也はそう思った。

ここにいたつて善也の身体は〈変態〉し始めたことにわれわれは気づくだろう。「ひよろひよろ」していて外野フライを落とし続け、「女の子たち」から「くすくす笑」われた身体は、いまや「ひよろひよると踊る」「すごくかわいい」身体となり、しかも新たな世界との「連帯」と「呼応」をその身体に感じている。こうして、善也に新しき〈名〉と〈身体〉が与えられた。彼女こそが新たな導き役であつたのだ。

しかし、「かえるくん」はあだ名にすぎないことを忘れてはなるまい。いまだ完全なる〈変態〉への途上にあるのだ。それをわれわれに知らせてくれるのが求婚の拒絶である。

大学を出たとき、恋人が彼に結婚してほしいと言つた。「あなたと結婚したいのよ、かえるくん。あなたと一緒に暮らして、あなたの子どもを産みたいの。あなたと同じくらい大きなおちんちんをもつた男の子を」

僕には君と結婚することができないんだ、と善也は言つた。今まで言いそびれていたんだけど、僕は神様の子どもなんだ。だから僕は誰とも結婚することはできない。

ほんとうに？

ほんとうに、と善也は言った。ほんとうに、悪いとは思  
うんだけど。

なぜ善也は求婚を拒絶したのか。しかも、なぜその理由が己の  
身体から剥奪したはずの「神様の子ども」であることに求めら  
れねばならないのか。ここで、求婚の拒絶と田端さんの死の直  
前の告白が連続して想起されていることに注意すべきだろう  
(二つの出来事が時期的に近接しているという客観的事実よりも)。なぜ  
なら、それは両者の因果関係を示唆しているに違いないから。  
今際の際に行われる田端さんの告白を見てみよう。

しかし死ぬ前に君に言っておかなくてはならないことがあ  
る。口にするのはとても恥ずかしいことだが、やはり言わ  
なくてはならない。それは、私が善也くんのお母さんに対  
して幾度となく邪念を抱いたということだ。君も知ってい  
るように、私には家族がいるし、心から愛している。加う  
るに、君のお母さんは無垢な心を持った人だ。にもかかわ  
らず、善也くんのお母さんの肉体を、私の心は激しく求め  
た。その想いを止めることはできなかった。私は君にその  
ことを謝りたい。

この告白を受けた善也は、「神の子どもたち」としての自分の  
存在を見いだす。どういうことか。まずは、田端さんの告白が

注意されるべきである。告白とはなにか。内面を見いださせる  
形式である。では内面とはなにか。超越性の監視によつて内在  
させられる心的領域である。つまり告白とは超越性のもとに正  
しく統一的内面を構成せんとする意思表示にほかなるまい。だ  
からこそ、告白はつねにその信ずる神(宗教的な意味に限らない「超  
越性」としての神)のもとに行なわれる。ここで、田端さんが『お  
方』でもだれでもなく善也に対して告白を行なわねばならな  
かったということは何を意味するか。両者に共通する神のもとに  
告白したということ、これである。そして、善也が田端さんに  
「邪念を抱いていたのはあなただけじゃない。息子である僕、だ  
つていま、だにろくでもない妄想に追いかけてられているんだ」と  
「打ち明けた」い衝動に駆られるとき、善也は田端さんと同じ  
地平に立つたのだ。いま二人は同じ神のもとにある存在者であ  
る。善也は神を受け入れたのである。そして、彼らは「神の子  
どもたち」として「かたちなき」「心」を伝え合っている。「告  
白」という制度が田端さんの閉じた世界を内破させ、善也の世  
界と接続した瞬間である。そして、この接続を可能にしたのが  
二人の握られる「手」である。触れる手は、触れられる手でも  
ある。自分の手が、相手の触れる手の対象として感覚される。  
むろん、それは自分の手の能動性が知覚された瞬間に逃れ去る  
ものではあるのだが。いずれにせよ、この瞬間に二人に「神」  
が宿ったことは確かなことである。ただ、この「神」がほん  
とうに何を意味するか、未だ善也はそれを知らないのだが。

いまや予言者の死によつて、予言の呪縛は解かれ、「神様の

子ども」をしての運命は偶然から自分で手にした必然へと変えられたのだ。その宣言が恋人への「僕は神様の子どもなんだ」ということばである。しかし、善也は未だ〈変態〉の途上にあるさなぎである。「いまだにろくでもない妄想に追いかけている」、つまり通過儀礼を終えてはいないのだから。さなぎは摂食や移動ができず、もちろん生殖はできない。彼女が「大きなおちんちんを持った男の子」を産むことはできないし、通過儀礼を未だ終えていない善也は、未だ「誰とも結婚することができない」のだ。さなぎは、完全なる〈変態〉に向けて繭の中や地中で身を守る。善也が「信者さん」の紹介してくれた出版社に就職したのも、「一人暮らしを始める」かどうか「大学に入ったときにも」「就職したときにも」「ずいぶん思い悩んだ」にもかかわらず、「結局、25歳の今にいたるまで、家を出ることはできなかった」（二人で放っておいたら、母親が何をしてくすかわかったものではないというのも、理由のひとつである）という事は、それは「理由のひとつ」ではないということである。のも、繭の中にあるようなものだ。善也は未ださなぎとしての「神様の子ども」である。内面が穿たれていない、「魂」なき身体なのだ。善也の「魂」は未だ「闇の中」を彷徨っている。しかし、いまやそう「深い闇」ではない。「魂」が「静かな晴れ渡ったひとつの時間とひとつの場所」にたどり着くためには、もうひとつの予言の呪縛が解かれればよいはずである。その呪縛が解かれるのはそれから三年後であるのだが。

もうひとつの予言とは何か。

「いいかい善也くん、君のお父さんであるその方はいつか、君だけのものとして、君の前に姿をお見せになる。予想もしないようなときに、予想もしないような場所で、君はその方にめぐり会うことができるだろう。」

これこそ未だ善也を呪縛しているもうひとつの予言である。この予言がある限り善也の身体は「父なるもの」の世界に絡めとられたままである。父は現れ、そのうえで消えねばならない。ここで、われわれは善也がなぜ「超重量級の二日酔い」であるのかを考えることで先に進めそうだ。「耳たぶの欠けた男」を追跡するのはその二日酔いの醒めぬままの善也なのだから。まず、善也はだれと飲んだのか。「大学時代の親しい友人と、その友人の知り合いの二人の女の子」である。しかも「そのあとで四人でディスコに入った」のだ。これは何を意味するか。過去の回帰である。恋人の求婚を拒絶した過去が回帰してきたはずだ。その状況で恋人との過去の記憶が蘇らない方が不自然であるに違いないから。その記憶は、未ださなぎの自分の姿をつきつける鏡として機能したはずだ。求婚を拒絶された恋人は、棄教を宣言したときの母である。「神様の子ども」であることを棄てる「宣言」が母を傷つけ、「神様の子ども」として生きる「宣言」が恋人を傷つける。どこまでも過酷な「神様の子ども」として担わされた運命である。いまの善也はこの過酷な運命から目を逸らすことしかできない。「超重量級の二日酔い」

の中で。「タイランド」のさつきがプールの中では「いろいろな記憶を頭の外に追いやる事ができた」ように。さつきが「プール」の中で「心ゆくまで泳ぐ」ことで「完璧な休息」と「何も考えない」ことを求め、「いつまでもこうしていられる」といいのだけれど」と思ったように、善也も繭の中に籠り過去の記憶の回帰から目を背けようとしたのである。たとえ無意識にせよ。しかしその同じ無意識は「いつまでもこうしていられる」わけではないことも知っている。この無意識こそが、「迷いもなく」「耳たぶの欠けた男」を追跡させたのだ。

そして起源の場所で眼鏡ははずされた——いま・ここから切り拓かれる世界

「耳たぶの欠けた男」の追跡が、過去の想起をとめないながらもなされるのは、この追跡が起源への遡行の旅であることを見やすくしている。旅の終着地が〈変態〉の端緒となった外野フライを落とし続けた野球場であることは必然である。野球場は起源の地、一種の聖地なのである。聖地への旅の道程もそのことを示している。参照先を求めよう。市川浩は「神話的な中心は集落のいずれにある」、「つまりは離れたところに中心がある」偏心型（非中心型）「であるとして、次のようにその意味を解いている。

中心点というよりは、ある方向があつて、その向うに何

かがある。彼方的な考え方です。それを横文彦さんは「奥」と呼んでいます。日本人の聖なる空間というのは奥にある。（略）参道というのはたいがい長い。参道を歩いていくことは、しだいに、聖なる奥へ近づいてゆくことです。周りには高い木などがあつて、だんだん世俗を離れた清浄な気分になってゆく。お稲荷さんで鳥居がいっぱい立っているところがありますが、鳥居は、そこをくぐるわけですから、ひとつの仕切りとして聖なるものを際立たせる。聖なるところへ近づいてゆくという感覚をあたえられます。

（『身』の構造』講談社学術文庫、一九九三年四月）

この参照項に照らしながら次の道程をみてみよう。

- ▼男が雑誌を鞆に戻し、席を立ってドアに向かったのは、もう少しで千葉県に入ろうという手前の駅だった。
- ▼交通量はほとんど無きに等しかったから、尾行そのものはむずかしくはないし、スリリングでもなかった。
- ▼住宅がまばらになり、河に沿って工場や倉庫の並んだ地域に入った。人氣がなく、新しい外灯だけがいやに目立っている。コンクリートの高い塀が長く続いているところで、前のタクシーが急に停まった。
- ▼あたりには人の生活の気配はなく、まるで夢の中でとらええすしつらえられた架空の風景のようだ。
- ▼路地の奥は暗く、何があるのか見定めることはできない。

▼両側を高い扉ではさまれたまっすぐな隘路だった。すれ違うのもむずかしいくらい狭く、夜の海底のように暗い。

▼しかし路地はすぐに行き止まりになっていた。袋小路なのだ。正面が金属のフェンスでふさがれている。ただよく見るとそこには、人が一人やつと通り抜けられるくらいの穴が開いていた。誰かがむりにこじあけた穴だ。善也はコトの裾をまとめ、身をかがめて穴をくぐった。

道程は、東京（中心）から、その「奥」へと向かっている。「千葉県に入ろうという手前の駅」で電車を降り、野球場に至るまでのこれらの光景は、まさに聖地に至る「参道」を思わせる。

さらに、この道程で現実の時空と意味が失われていくことも注意されてよい。母親が震災ボランティアとして赴いている「その場所は自分からも、自分の向かいに座って熱心に雑誌を読んでいる男からも、何光年も遠く離れたところにあるように」感じられており（七）、でもない場所、「男の革靴がたてる」のは「こつこつという匿名的な音」（いつでもない時間を刻む音）である。

男と善也は時空を超えてどこでもない場所といつでもない時間の中を歩き続けるのだ。加えるなら、男はあるひとつの目的のもとに歩いている。男の歩く姿が「よくできた機械人形が磁石に引き寄せられているみたいに見える」たの目を留めればよい。「機械」とは動力をうけてある目的に応じた仕事をするものであるとするなら、男はまさに起源地の地へと善也を誘う機械である。むろん動力を給しているのは神であろう。その神に「光の

届かない世界で善也はするように歩を進め」ているのだ。「しかし路地はすぐに行き止まりになっていた。袋小路なのだ」。

その神の導きはこままでた。起源の場所へは一人で行かねばならない。「人が一人やつと通り抜けられるくらいの穴」をくぐって。「誰かがむりにこじあけた穴」の「誰か」が十三歳の善也であったのはいうまでもない。十三歳の善也は「金属のフェンスでふさがれ」た『お方』の世界、「父なるもの」の世界から棄教という「穴」を「むりにこじあけ」て（すなわち、母を崩壊の危機に晒して）飛び出したのだから。その「穴」を再び十二年後の善也がくぐったのだ。「外野のセクター」の「守備位置」の「地面が傷跡のように露出している」起源地の地へ舞い戻るために。そして、このときすでに「男の姿はどこにも」見えなくなっている。父は現れ、そして消えたのだ。起源地の地で男が消えたとき二つめの予言の呪縛もまた解かれるにちがいない。「父親らしき男」が消えるとともに「父なるもの」の世界は消え失せる。「父なるもの」の世界の「意味そのものが分解し、もうもとに戻らなくなってしまった」。こうして、善也は起源地の地への旅を終え、完全なる〈変態〉を遂げる。いまや善也は父なき「神の子」として「踊る」身体へと〈変態〉を遂げるのだ。

「自身が抱えている暗闇の尻尾」を「目にして、追跡し、すぐりつき、そして最後にはより深い暗闇の中に放」り、ようやく「暗闇」を通り抜けた「魂」がそこに出現する。「大きな月」に照らされ「静かに晴れ渡ったひとつの時間とひとつの場所にたたず」む「魂」と完全なる〈変態〉を遂げた身体が出会った

瞬間、すなわち身体に内面が穿たれた瞬間は、「ひとつの顕現」であり「秘蹟」でなくて何であろう。「誉むべき」瞬間である。その「魂」を宿した身体はいま・ここから自らの世界の地平を切り開いていこうとする身体である。そのいま・ここはほかのどこでもなく起源の地でなければならなかった。この世界と別の世界がどこかにあるわけではないのだから。新たな地平はこの足元から切り拓かれねばならないのだ。

こうして、善世は「ピッチャーズ・マウンドに아가り、眼鏡をはずす。市川浩は「無意識のうちにわれわれは用具の構造に身をそわせ、用具に組み込まれている」のであり、身体は、その外部のものである用具によって「命令され、支配されていく」といつてもいい」存在であると指摘している（前掲書）。「眼鏡」は、「父なるもの」の世界を正しく見るための用具であり、「父なるもの」の支配の象徴である。朝目覚めた善世のもとに「あるべき場所に、時計」も「眼鏡も」なかったのもけつして偶然ではない。「時計」も時間を均質化することによって身体を制度化するものにはかなるまい。「無意識にどこかに投げとばした」身体は「これ以上眠れっこないこと」、すなわちさなぎのままではいられないことを「よくわかつていた」のだ。「前にも同じようなことをやった」とは、もちろん十三歳のときの棄教だ。いまの善世に「眼鏡」は必要ない、それどころか見ることさえ必要ない。「目を閉じ、白い月の光を肌を感じながら」、「草のそよぎと雲の流れにあわせて」「自律的に」踊る身体は、いわば世界と癒合したゲシュタルトとしての身体であり、経験

（意味を持つものとしての行為）の手前にある内在としての身体である。そこに、世界を対象化することで生じる「恐怖」が「なかった」のは当然である。大澤真幸はこのような「舞踏」の本質の意味を端的に述べている。

意味へと志向する身体の活動が、志向された意味を対象として外部に分離することなく直接に提示された場合には、活動そのものが、自己自身へと志向する表現として自律する。これが舞踏にほかなるまい。（『身体の比較社会学Ⅱ』）

本来的にわれわれは、この非中心化した身体と、存在者として世界を中心化する（意味づける）身体との、（同時的な）絶えざる往還をなすことで、自己と他者を同時に把握している。世界との癒合と、「大地」への着地を繰り返すのが、われわれの身体なのだ。しかし、足をつくべき地面が必ずしもあるとは限らない。そこには「底なしの穴」が口を開けて待っているかもしれないのだ。たとえば市川浩が次のように指摘するように、大地とは両義的存在である。

そういうわけで、〈上〉は、神・天・天国というイメージであり、〈下〉は、悪魔（墮天使）・地獄・黄泉の国というイメージになります。しかし上下はたいへん特権的な価値の方向ですから、下は必ずしもマイナスとはいえない。マイナスといっても、一種の聖なる性質をもつわけです。

つまり、反聖性という意味での聖なる性質をもつ。だから大地は両義性をもっています。たとえば大地母神（グラン・ドマザー）とか、母なる大地（マザー・アース）とかいういい方がありますけれども、そういう場合、大地は、産むという意味でプラスの価値であると同時に、飲み込み、破壊するものでもある。生産と破壊という両面をもっている。（前掲書）

われわれは、呑み込むものとしての大地に引きずり込まれ、地の底の「ぬるぬるとした虫たちの蠢き」の中で身を振ることもあり得る。たとえば精神医学が明らかにしているように、われわれの身体は、一歩間違えば世界に呑み込まれ、自己が崩壊する危険と常に隣り合わせにある危うい身体でもある。しかし、それは存在者として背負う宿痾であり、原罪なのだ。われわれは、それを背負ってこの世界に存在するしかない。着地してみなければ、そこに「大地」があるかどうか知ることすらできないだろうから。

善世は遠くの崩壊した街にいる母親のことを思った。もしこのままうまく時間が逆戻りして、今の僕が、その魂が深い闇の中にあつた若い時代の母親にめぐり会うことができたとしたら、そこで何が起こるだろう？ おそらく二人は混迷の泥を同じくし、隙間もなく合致し、貪りあい、そして激しい報いを受けることだろう。でもかまうものか。

そんなことを言いだしたら、もつと前に報いを受けてしかなるべきだったのだ。僕のまわりでこそ都市は激しく崩れさるべきだったのだ。

善世の欲望が「若い時代の母親」に向けられていることが注意されなくてはならない。それは、現実の母親とは分離された、善世の内的存在としての母である。母への欲望という「深い闇」を内に抱えた自分を、まるごと受け容れ、それが自分という存在だと受け止めたとき、「その魂が深い闇の中にあつた」母親もまた他者として受容されたのである。ここにおいて、自／他の分離、すなわち母との分離は果たされたのだ。もはや母は呑み込むものとしてあるのではなく、向き合うものとして在る。長い通過儀礼は、今終えられた。と同時に、それは新たな旅への出発を意味する。「獣」のいる内なる「森」を「通り抜けていく」旅は、いま・ここから始まる。この旅にはもう「導き役」はいない。いま・ここから切り拓かれるべき、すなわち未だ切り拓かれざる地平に向けての跳躍を繰り返す旅を導いてくれる「導き役」など、どこを探してもいないのだ。この跳躍は、独り他者への信頼においてのみなされる。地平を切り拓くとは、世界はこのようにあるということが無根拠に前提すること、この私の身体の意味を生ぜしめている他者を前提していることにはかならないから。したがって、「善きものであれ、悪しきものであれ」、「魂」を「どこまでも伝えあうことができる」他者こそが、新しき地平を拓く者でもある。自己受容とは、正しく



他者受容なのである。そして、魂を照らす光はわれわれの身体の「自然な律動」と「連帯し呼応している」月の光だ。「自然な律動」によって「大きくなったり小さくなったりする」月の光なのだ。けっして、「正しい光」が「暗雲のうしろに隠されて」いるわけではない。正しさは地平を切り拓かない。正しさは、世界の「大地の瘤」を均し、身体をそこに縛り付けるものとしてある。善世の母が医者の子にその身体を否定され、世界に絶望し、命を絶とうとしたように。われわれの世界の「地」と「囟」はいつでも反転しうるし、「地」が「囟」であると同時に「囟」が「地」であるような世界もあり得る。われわれは、いまやそのような世界にいるのではないか。「ダグラス・R・ホフスタッターがいうところの「再帰的な囟」、すなわち「その地がそれ自身囟として見えることができるような」囟。その「再帰的な囟」の中の、囟と地の境界線は、両刃の剣である」。M・C・エッシャーの『鳥で平面を埋めつくす』という作品を見てもらえばよい。『ゲーデル、エッシャー、バッハ』あるいは不思議の環』ダグラス・R・ホフスタッター、白揚社、一九八五年五月）大地の「底なしの穴」は、常に足下に開いているのかもしれない。だからこそ、われわれは、知らず「口に出して言」うのではないか、「神様」と。その声は父なき「神の子どもたち」を励ます「神様」自身の声として聴こえるはずだから。

### 正しさを超えて

以上のような旅の検証は、テクストのざらつきを均し、その手触りを無くすことになってしまったかもしれない。しかし、短篇集『神の子どもたちはみな踊る』の各テクスト間を移動するとき、冒頭で挙げたような反復するモチーフの手触りが、テクストに応じて微妙に変化することに気づくだろう。あるテクストを意味づけた瞬間、別のテクストの一度均したはずの地がいつのまにかざらつきを取り戻している。いま・ここに立ったときと、別のいま・ここに立ったときの視差が同じ対象を変容させるのだ。この視差は、テクストの背後にゆらめく別の世界を幻視させることになる。それは、たしかにこの世界ではない、いわば夢の世界であるかもしれない。しかし、夢は、現実世界（と思っているもの）を裂開し自分の外部を垣間見せるものであると同時に、自分がたしかにこの世界に在ることを逆照するものでもある。かえるくんを励まし続けた片桐が言ったのではないか、「目に見えるものがほんとうのものとは限らない」のだ。

重ねて言えば、幻視は絶えざる移動によってのみもたらされる。そのさなかのわれわれの不安定な身体は、まさに「ひよろひよろと踊る」ように見えまいか。